

「鳥取二十世紀梨」輸出の現状

2006年12月11日

21世紀政策研究所
研究員 横田 洋之

「鳥取二十世紀梨」輸出の現状

21世紀政策研究所 研究員 横田 洋之

1. はじめに

鳥取県で生産される二十世紀梨（以下、「鳥取二十世紀梨」と表記する）は、1933年以來70年以上の輸出の歴史を持つ日本の代表的な輸出農産物である。本稿では、関係者へのインタビューと文献調査を基に、この「鳥取二十世紀梨」輸出の現状と今後の課題について紹介する。

(1) 二十世紀梨生産適地の鳥取県

鳥取県は、本州の西端に位置する中国地方の北東部にあり、東西約120km、南北約20～50kmと、東西にやや細長い。日本海に面しているが比較的温暖であり、年間降水量は多いにもかかわらず、4月から6月の梅雨の降水量が比較的少ないことが、二十世紀梨の栽培に適している要因の一つになっている。

人口は約60万人(47都道府県中最小)、全世帯中の約16%に当たる約35,000戸の農家(内、専業農家は4,398戸)があり、うち日本梨農家は約2,900戸である(図表1)。また、日本梨農家の規模分布を栽培面積で見ると、0.5ha以上1ha未満が1,030戸(全体の35%)と最も多く、次いで1ha以上1.5ha未満が713戸(同24%)、1.5ha以上2ha未満が434戸(同15%)であり、全日本梨農家の平均栽培面積は1戸当たり0.4haである(図表2)。

なお、鳥取県は全国有数の農業県である一方、県内総生産の4分の1強を第2次産業が占め、製造品出荷額における電子・電気産業の占める割合が約5割と全国トップである。とりわけ電子部品は世界でも高いシェアを保ち、国内外のハイテク産業の重要生産拠点となっている。

図表1:鳥取県の人口等

人口	総世帯数	総農家数	日本梨農家数
604,525人(06年9月推計)	214,494世帯(同左)	35,031戸(05年2月)	2,944戸(同左)

【鳥取県ホームページ「データで見る鳥取県」(URLは本稿末の参考文献に記載。以下、同様)、鳥取県「2005年農林業センサス」より作成】

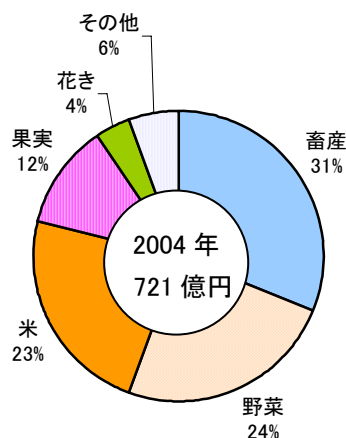
図表2:鳥取県の日本梨栽培面積(05年2月)

栽培面積	農家数(戸)	構成比
0.3ha未満	50	1.7%
0.3～0.5	281	9.5%
0.5～1.0	1,030	35.0%
1.0～1.5	713	24.2%
1.5～2.0	434	14.7%
2.0～2.5	201	6.8%
2.5～3.0	99	3.4%
3.0～4.0	73	2.5%
4.0～5.0	30	1.0%
5.0～7.5	22	0.7%
7.5～10.0	6	0.2%
10.0～15.0	5	0.2%

【鳥取県「2005年農林業センサス」より作成】

鳥取県内の大半の市町村で二十世紀梨を生産しているが、特に生産量の多いのは旧東郷町（現：湯梨浜町）や旧東伯町（現：琴浦町）、旧佐治村（現：鳥取市）等である。梨以外の農業では大山山麓地帯の酪農、山間地域の肉用牛の飼育、平野部や砂丘地帯での野菜、および水稲、果樹などの栽培が行われている（図表 3）。

図表 3: 鳥取県の農業産出額



【鳥取県「鳥取県農林水産業の概要（平成 18 年度）」より作成】

(2) 二十世紀梨の特徴

梨の種類には大きく日本梨、西洋梨、中国梨があり、国内で生産されているのは主に日本梨である。さらに日本梨は果皮の色によって青梨系と赤梨系とに分類される。青梨系は種類が少なく、二十世紀梨（大きさは 300～500g 程度）はその代表的な品種であり、多くは幸水（350～500g 程度）、豊水（350～650g 程度）、新高（500～800g 程度）、南水（400g 程度）、愛宕（1kg 程度）といった赤梨系である。幸水や豊水は二十世紀梨と他品種との交配を経て生まれた品種である。

日本での日本梨の栽培の歴史は古く、奈良時代に始まったとする記録もあり、日本独特の果樹の一つとなっている。日本梨は夏の生育期間中に降水量が多く、温暖な日本の気候に適しているため全国各地で栽培されている¹。さらに日本梨は 1985 年頃からアジア等海外でも栽培が進んでおり、特に中国や韓国では栽培面積が増大し、日本梨の輸出も行っている²。

こうした日本梨の歴史に大きな影響を与えたのが二十世紀梨である。二十世紀梨は、淡緑色、程よい酸味、果汁が多く瑞々しい、シャリシャリとした歯ざわり、日持ちが良いといった点の特徴である。4 月中旬に白い花を咲かせるが、ほとんど自然交配をしないため、他の品種の花粉を人工交配しなければならぬ。また二十世紀梨は病害虫や農薬の直接塗布を防止するため、および外観を美しくするため摘果³後に 5 月から 6 月にかけて、2 度袋がけを行う必要があるが、作業労力と資材経費がかかるため、赤梨では袋をかけない栽培が行われている⁴。収穫期は 8 月から 9 月頃である。

¹ 永澤勝雄・松井弘之・土屋七郎 編修（1999）『果樹入門』 実教出版

² JA 全農とっとり『鳥取県におけるナシ輸出の取組について』（2004）

³ 果実の小さいうちに間引くこと。大きい果実を収穫するため、および果実のなり過ぎによる樹勢の衰えを避けるために行う。（園芸ネット「園芸用語辞典」<http://www.engei.net/dictionary/index.asp> より）

⁴ 脚注 1 に同じ。

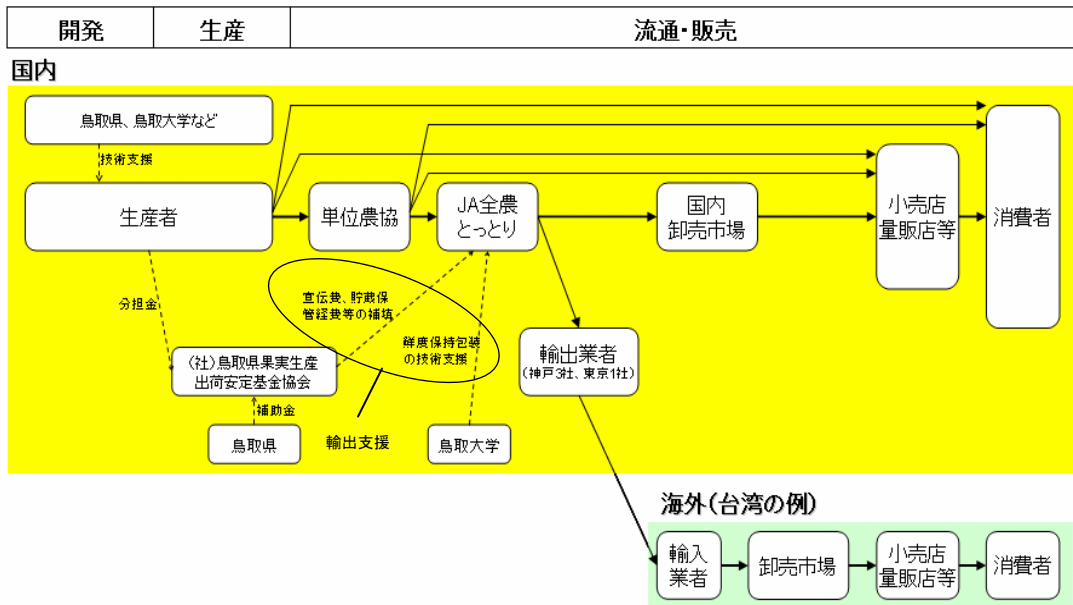
(3) 「鳥取二十世紀梨」の開発略史

二十世紀梨は、1888年に千葉県松戸市で偶然発見され、1904年に初めて鳥取県に導入された。その後、最大の障害であった黒斑病（こくはんびょう）の打撃を受け、愛媛県、愛知県、静岡県等の他産地が栽培を断念する中、鳥取県では産地が一体となって対策に取り組み、病害虫や台風などの自然災害をも乗り越えたことで、日本一の二十世紀梨の産地となった。黒斑病については、1930年頃に保護用のパラフィン紙を全国で初めて開発するなどの技術革新の成果に拠るところが大きい。他に一大産地となった要因として、気候や土質が適していたこと、選果、商品規格、販売窓口の統一など品質向上に早期から取り組んできたことなどが挙げられる。

(4) 「鳥取二十世紀梨」の事業システム

「鳥取二十世紀梨」の事業システムの概略を図表4に示す。取扱シェアについて、まず生産者から各単位農協へ販売が委託される割合が8割程度（01年は77%⁵）であり、さらにその7割程度がJA全農とっとりへ販売を委託される（＝「鳥取二十世紀梨」の出荷全体におけるJA全農ととりの取扱シェアは5～6割）。残りは主に贈答用として百貨店や消費者へ直接販売されるとみられている。輸出については、後の2.で詳しく述べるが、鳥取県や鳥取大学等からの支援も行われている。

図表4:「鳥取二十世紀梨」の事業システム



注) 仲卸業者やJA全農ととりを通さない輸出ルート等は簡略化のために省略した。

【取材等を基に作成】

⁵ 「集出荷団体による出荷量 (30,800t) ÷ 出荷量合計 (39,900t)」により計算。

(5) 日本国内における梨の品種別出荷状況

日本国内における日本梨の市場規模は縮小傾向が続いており、とくに 90 年代後半以降、数量の減少以上に低価格化が顕著である（図表 5）。

鳥取県の 2005 年産日本梨の出荷数量は 27,000 トンでシェア 8%だが、二十世紀梨に限ればシェア 49%（2 位は長野県の 12%）と国内では圧倒的なシェアを誇っている（図表 5、6）。

品種別で見ると、最近では幸水や豊水といった糖度の高い品種が人気を得ており、二十世紀梨の出荷量は年々減少傾向にある。幸水、豊水のいずれも二十世紀梨の改良種であるが、1970 年代から 80 年代にかけて長十郎が減る中で幸水が伸び、80 年代末からは二十世紀が減る中で豊水が伸びてきた。2005 年産の日本梨の出荷数量・卸売金額（括弧内はシェア）は順に、幸水 12 万トン（36%）・222 億円（41%）、豊水 10 万トン（30%）・152 億円（28%）、二十世紀梨 4 万トン（13%）・72 億円（13%）であった（図表 7、8）。

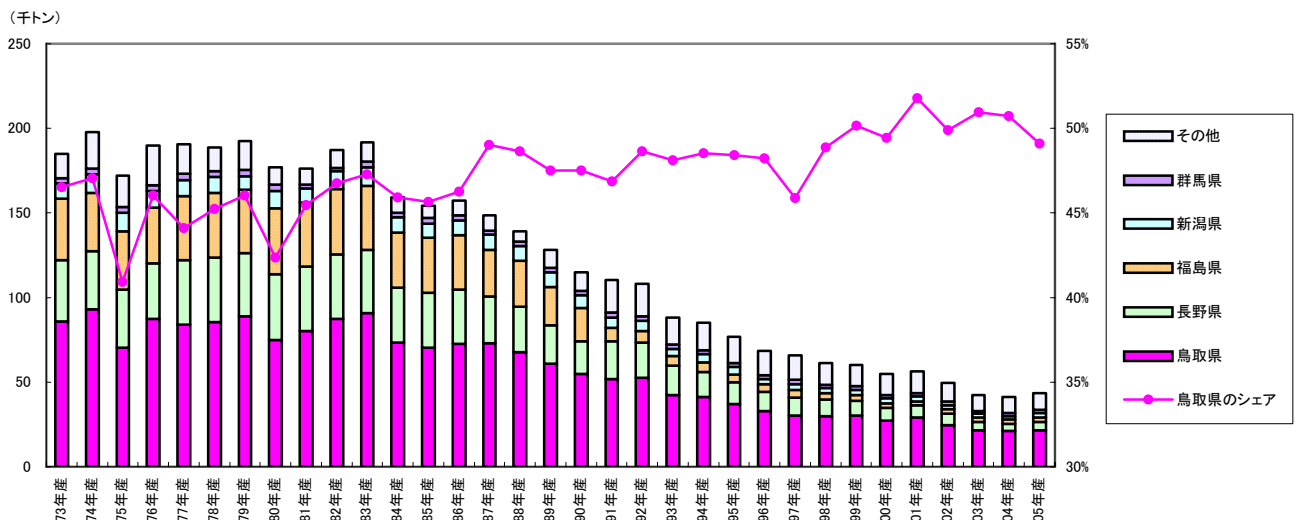
図表 5: 日本梨の国内出荷数量・卸売金額

		96年	97年	98年	99年	00年	01年	02年	03年	04年	05年
出荷数量(トン)	全国日本梨	349,500	374,400	353,500	361,300	364,000	340,400	346,000	305,300	300,700	331,900
	全国二十世紀梨	68,400	65,800	61,400	60,000	54,800	56,400	49,500	42,400	41,400	43,600
	対全国日本梨	19.6%	17.6%	17.4%	16.6%	15.1%	16.6%	14.3%	13.9%	13.8%	13.1%
	鳥取二十世紀梨	33,000	30,200	30,000	30,100	27,100	29,200	24,700	21,600	21,000	21,400
	対全国二十世紀梨	48.2%	45.9%	48.9%	50.2%	49.5%	51.8%	49.9%	50.9%	50.7%	49.1%
卸売金額(百万円)	全国日本梨	89,700	88,176	86,544	89,730	80,110	67,594	63,600	57,127	57,571	54,062

注) 出荷数量は年産。果樹は 1 年 1 収穫期であることから年産は暦年が原則だが、出荷開始期などから出荷期間が 2 カ年にわたる品目は、その全量を主たる収穫期間の属する年の年産とする（農林水産省「果樹生産出荷統計」より）。

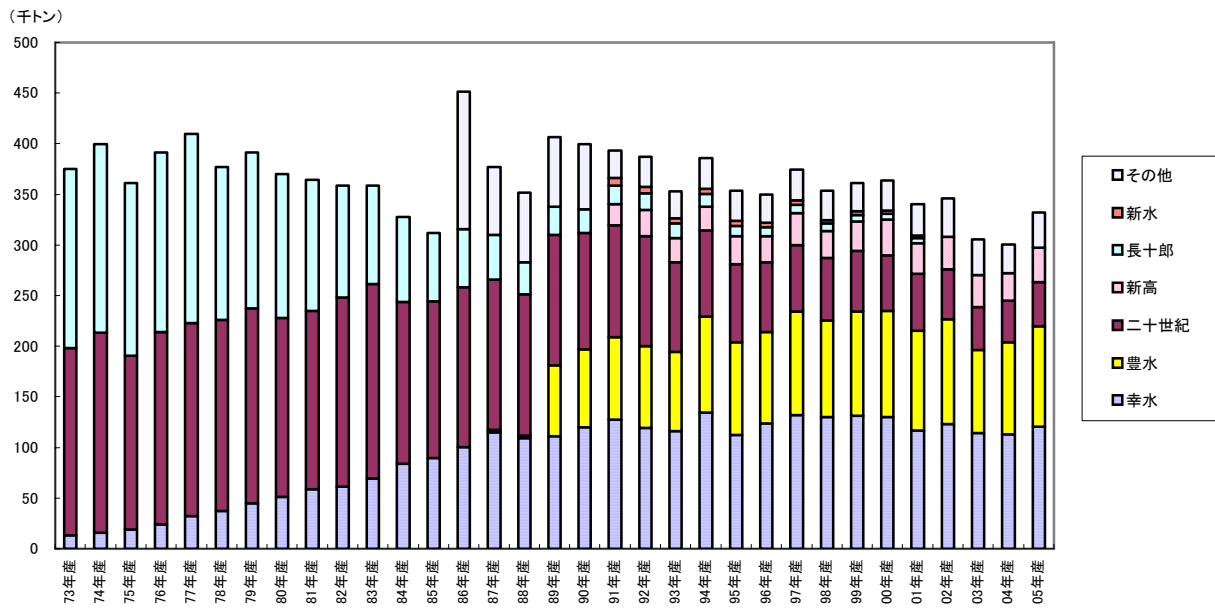
【農林水産省「果樹生産出荷統計」「青果物卸売市場調査」より作成】

図表 6: 二十世紀梨の都道府県別出荷数量



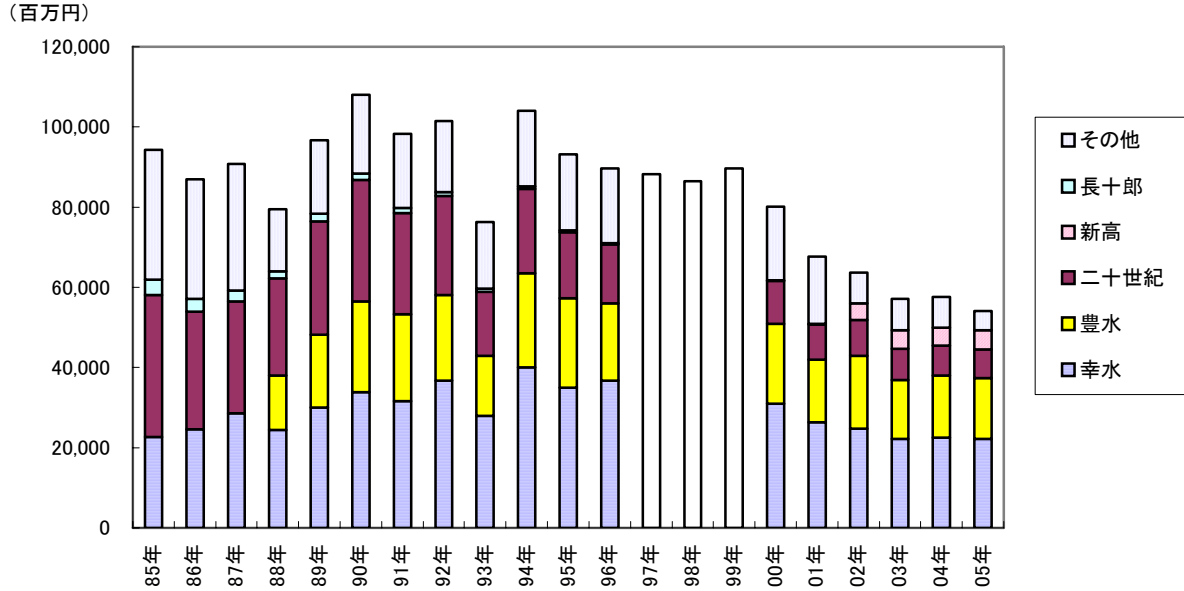
【農林水産省「果樹生産出荷統計」より作成】

図表 7: 日本梨の品種別国内出荷数量



【農林水産省「果樹生産出荷統計」より作成】

図表 8: 日本梨の品種別国内卸売金額



注 1) データは主要卸売市場とその他卸売市場の合計金額。ただし、新高は主要卸売市場のみの金額。

注 2) 97年から99年は農水省が品種別データを未作成のため合計金額のみ記載。

【農林水産省「青果物卸売市場調査」より作成】

2. 「鳥取二十世紀梨」輸出の現状

ここでは日本の梨輸出全体を踏まえつつ、「鳥取二十世紀梨」の輸出について、これまでの実績と現状を概観し、輸出を継続してこられた要因を考察する。

(1) 輸出実績

梨は日本の代表的な輸出農産物の一つであり、2005年は2,137トン、8億円（いずれも西洋梨を含む）が輸出された。1. (5) で述べたように現在、日本国内で出荷される梨の過半は幸水や豊水といった赤梨であり、二十世紀梨のシェアは13%（05年産）にすぎないにもかかわらず、日本から輸出される梨のおよそ9割程度は「鳥取二十世紀梨」である。これは日持ちの良さによるところが大きい。二十世紀梨は他の日本梨に比べて抜群に日持ちが良い（2週間程度）ため、船便での長時間輸送が可能なのである⁶。なお、「鳥取二十世紀梨」輸出のおよそ8割程度（＝日本の梨輸出全体の約7割）はJA全農ととりが取り扱っているとみられている（図表9）。

図表9: 梨の輸出数量・金額

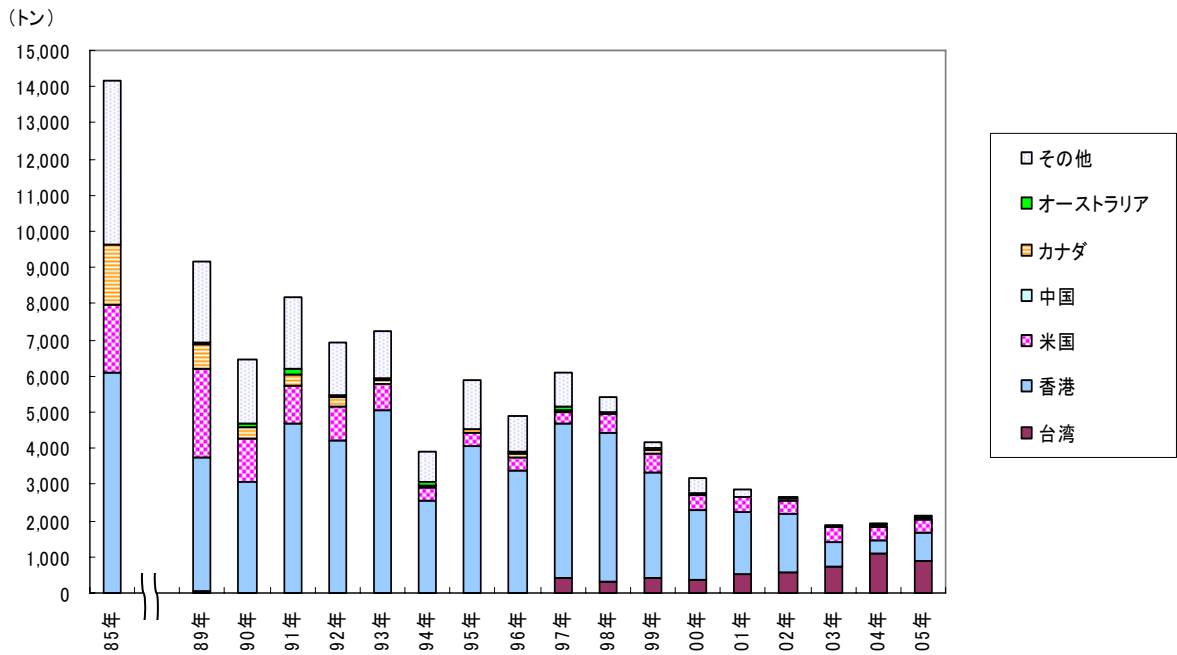
		96年	97年	98年	99年	00年	01年	02年	03年	04年	05年
輸出数量(トン)	全国梨	4,897	6,100	5,407	4,187	3,195	2,860	2,664	1,886	1,951	2,137
	鳥取二十世紀梨	4,109	5,490	4,324	3,559	2,876	2,689	1,629	1,773	1,750	—
	対全国梨	83.9%	90.0%	80.0%	85.0%	90.0%	94.0%	61.1%	94.0%	89.7%	—
	JA全農ととり取扱	2,316	3,570	2,415	2,065	2,117	1,835	1,626	1,475	1,451	1,215
	対鳥取二十世紀梨	56.4%	65.0%	55.8%	58.0%	73.6%	68.2%	99.8%	83.2%	82.9%	—
輸出金額(百万円)	全国梨	1,711	2,149	2,076	1,580	885	777	762	624	681	796

【全国は財務省「貿易統計」、鳥取はJA全農ととり「二十世紀梨仕向別輸出数量の推移」「農産物の国別輸出実績」より】

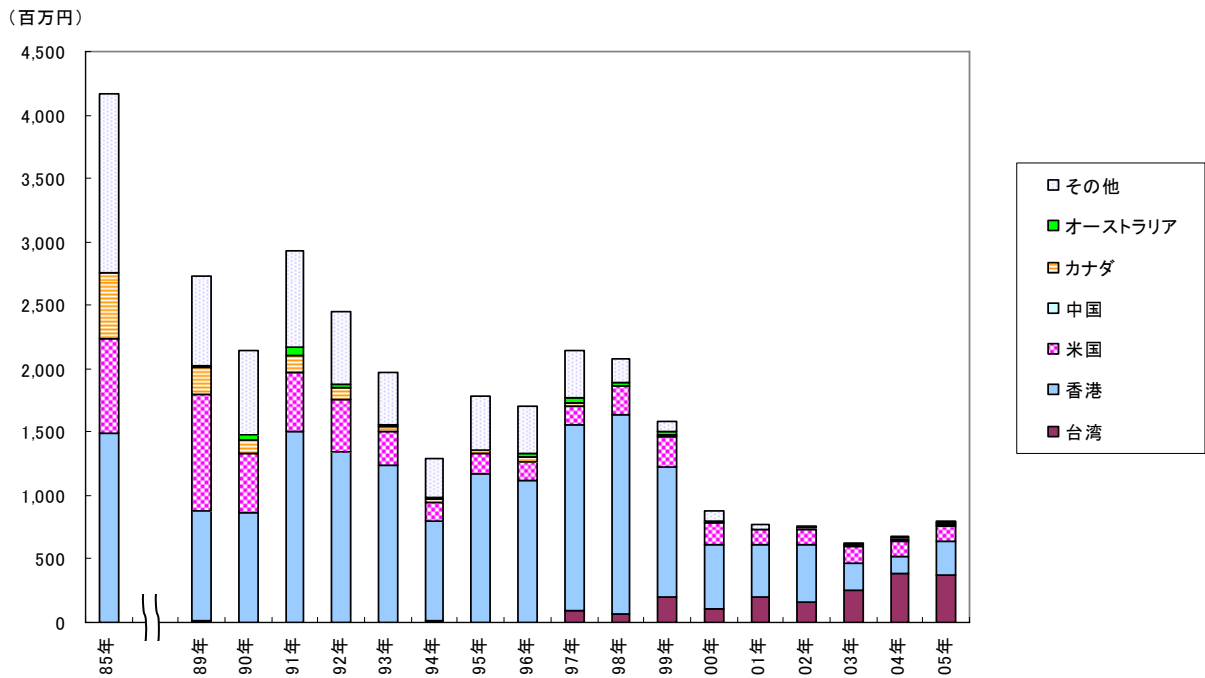
全国の梨の輸出動向をみると、1997年頃に国内生産量増や一時的な円安により増加に転じたものの、1985年のピーク（14,151トン）以降は数量・金額とも円高や香港市場での中国産の台頭等により、2003年にかけて概ね減少傾向にあった。しかし2002年に台湾がWTOに加盟したことを契機に、翌年から台湾向けの輸出が大幅に増加した結果、輸出合計でも増加傾向にある（図表10、11）。

⁶ 村田謙司「「農林水産ニッポンブランド輸出促進都道府県協議会」の活動ならびに鳥取県の二十世紀梨輸出の取り組みについて」（『フレッシュフードシステム』2004年夏号、第33巻3号、（社）流通システム研究センター）。

図表 10-1: 全国梨の国別輸出数量※



図表 11-1: 全国梨の国別輸出金額※



※数値表は本文末に記載 (図表 10-2、11-2)。

【いずれも財務省「貿易統計」より作成】

「鳥取二十世紀梨」輸出の現在までの経緯は以下のとおりである。

1933年から2002年

「鳥取二十世紀梨」の輸出は、その「日持ちの良さ」を活かし1933年から中国や台湾等の在外邦人向けに始まった。第二次世界大戦で一時中断されたものの、戦後、情勢が安定した1949年から輸出が再開され、東南アジア向けを中心に着実に実績をあげた。1970年以降はハワイ、カナダ、中近東等へ輸出が拡大し、1980年代には生産量の飛躍的な増大を背景に国内販売の需給調整の必要が高まったため、更なる輸出拡大に取り組み、米国本土や欧州へも輸出を開始した。1985年には輸出の数量が12,134トンとピークを迎え、生産量の約17%を占めた。

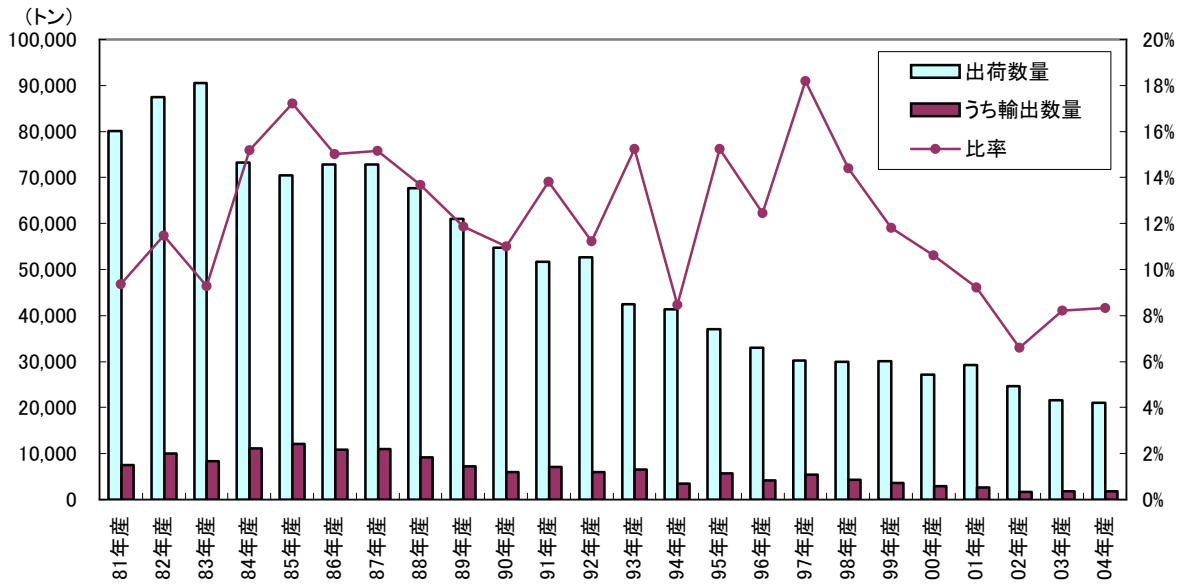
しかし1985年のプラザ合意以降の急激な円高や、豪雪による生産量の減少等により輸出数量はほぼ一貫して減少に転じた。さらに1994年頃から、韓国産や中国産の安価な日本梨が大量に輸出されるようになったことも、輸出減少の要因の一つである。こうした状況の中、中近東、欧州、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア、シンガポールへの輸出から撤退した。

2003年以降

輸出が減少の一途をたどる中、「鳥取二十世紀梨」輸出全体の約8割を取り扱うJA全農とっては、2003年から「攻めの輸出」へと戦略を転換した。すなわち、以前はどちらかというと下級品を安く海外へ出すことで国内供給量を調節し、国内価格を下支えすることが輸出の主な目的であったが、需給調整に留まらず「鳥取二十世紀梨」を高級ブランド品として台湾等へ売り込み、それ自体で収益をあげる方向へと動き始めたのである。その結果、2004年産「鳥取二十世紀梨」は出荷量全体の約8%に当たる1,750トンが輸出された（図表12）。

契機となったのは、2002年の台湾のWTO加盟である。それまでわずか400トンだった梨の輸入数量枠は、2002年4,900トン、2003年7,350トン、2004年には9,800トンに拡大され、また50%だった関税率を輸入数量枠内については18%まで引き下げられた。香港、米国、その他向けが概ね減少傾向にある一方、台湾向けが02年346トンから、03年641トン、04年859トン（いずれもJA全農ととり取扱分）と急増し、現在では最大の輸出先となっている。2005年産の主な国別輸出数量は台湾609トン、米国358トン、香港213トンであった（図表13）。

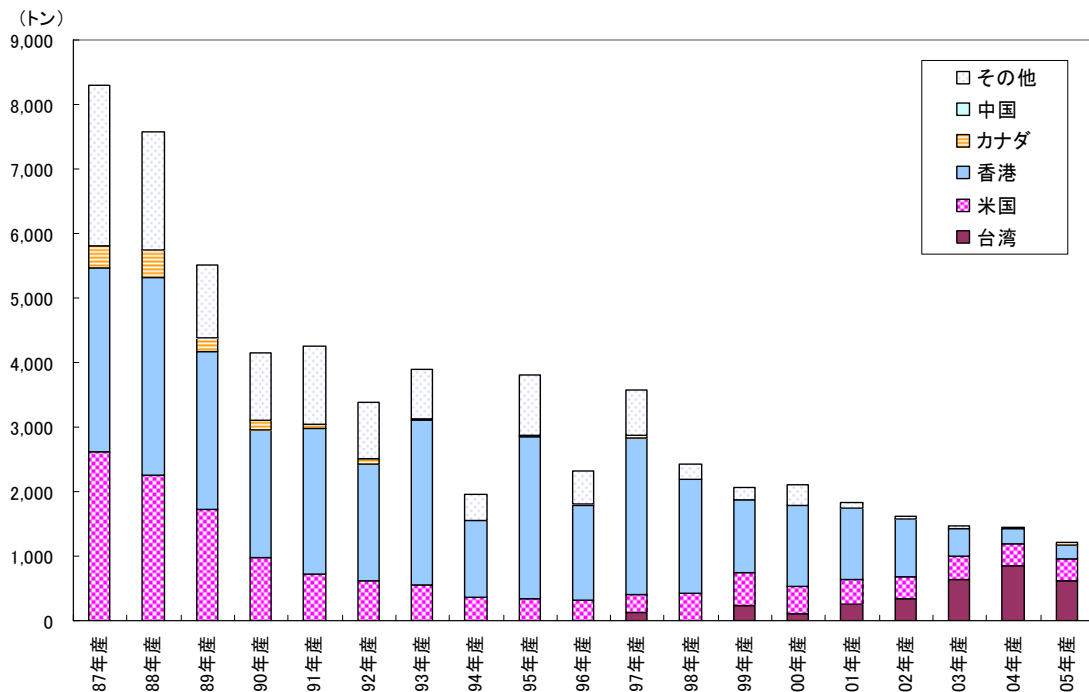
図表 12-1:「鳥取二十世紀梨」の出荷数量と輸出数量(鳥取県全体)※



※数値表は本文末に記載 (図表 12-2)。

【JA 全農とっとり「二十世紀梨輸出年表」「二十世紀梨仕向別輸出数量の推移」より作成】

図表 13-1:「鳥取二十世紀梨」の国別輸出数量(JA 全農とっとり取扱分)※



※数値表は本文末に記載 (図表 13-2)。

【JA 全農とっとり「二十世紀梨仕向別輸出数量の推移」より作成】

(2) 輸出の事業システム

「鳥取二十世紀梨」の輸出は、台湾や米国向けはほぼ全て JA 全農とつとりが取り扱っているが、香港向けのみ輸出業者が国内卸売市場等で仕入れ独自のルートで輸出するケースが多い。これは香港は自由貿易政策を推進しており、関税がかからず輸入許可の手続きも最小限に抑えられている⁷ため、中小の輸出業者にとっても輸出が容易なことによる。現在、輸出全体では8割程度を JA 全農とつとりが取り扱っており、輸出業者、輸入業者、販売店とのパイプ作りなども同 JA が主導して行っている（図表 4）。

輸出を促進する仕組みとして2つある。1つは、社団法人鳥取県果実生産出荷安定基金協会（1987年設立）を通じて生産者が出荷量に応じて分担金を支払い宣伝費や貯蔵保管経費等の補填をする仕組み（1991年開始）であり、もう1つは輸出向けに限り、JA 全農とつとりが生産者から国内市場価格に輸出奨励金を上乗せした価格で全量を買取り取る仕組みである。輸出用は国内向けとは異なり、英文の説明書を入れたり、緩衝材に国内向けとは異なるものを入れたりする手間がかかるため、同 JA が奨励金を付けているのである⁸。

一方、鳥取県は輸出支援を見本市等の販売促進や知事によるトップセールスなどに限定し、あくまで現場の自主性に任せる方針をとっている。

(3) 台湾市況および競合

最大の輸出先である台湾には春節⁹や中秋節¹⁰に、神仏供養や世話になった人へのお礼に果物を贈る習慣があり、高品質を誇る日本産のりんごや梨が一定のブランド地位を築いている。台湾では人々はもともと果物を好み、バナナやマンゴーなど様々な果物を生産し世界各地へ輸出もしている。さっぱりとして瑞々しい「鳥取二十世紀梨」は、他品種の梨にはないジューシーさとシャリ感があり、また亜熱帯性気候の台湾では青梨が生育しないことが人気の理由である。

台湾市場における主な競合相手は韓国産「黄金」「新高」である。品質では日本産に及ばないものの、2分の1程度の値段で販売されており、主に日常食用の中級以下のクラスにおいては圧倒的に強い。韓国産の強みは、①早取り（熟す前の青い状態で収穫）して中秋節に間に合わせられるうえ、冷蔵保存しておいた梨を1月から2月にかけての春節前に輸出できる¹¹、②多くの業者が毎週のように台湾へ足を運び情報収集を行っている、点などにあるとみられている。背景には、「かつて援助の一環として二十世紀梨の韓国、中国への生産技術の供与があり、それが各地に定着して、今や競争相手になってきている」¹²という事情がある。

(4) 輸出の収益性

現在 JA 全農とつとりの輸出事業を単独で見ると収支はほぼ均衡している。輸出先別にみると、高級品が好評な台湾では黒字を確保できている一方、香港（中級品以下が主）と米国（高級～中級品）では赤字である。このように単独では採算が厳しい状況においても輸出を継続する意味として、JA 全農とつとりでは、国内価格の底上げと販路拡大を挙げている。

また生産者にとっては、輸出向けは同 JA が国内市場価格に奨励金を上乗せした価格で買い

⁷ 日本貿易振興機構（ジェトロ）「平成 16 年度農林水産物貿易円滑化推進事業 貿易情報海外調査報告書－香港編－食品別輸入関連規則・流通事情」2005 年 3 月

⁸ 「全農 鳥取県本部 百年かけた技と味 二十世紀梨の輸出」（『フレッシュフードシステム』2004 年夏号、第 33 巻 3 号、（社）流通システム研究センター）

⁹ 旧暦の元旦。新暦では 1 月下旬から 2 月下旬頃で毎年異なる。

¹⁰ 旧暦 8 月 15 日の節句。新暦では 9 月から 10 月初め頃。

¹¹ 東野昭浩「台湾への果実輸出の現状」（『果実日本』第 59 巻第 10 号、日本園芸農業協同組合連合会、2004 年）

¹² 脚注 8 に同じ。

取るうえ、売れ残りや為替等のリスクを回避できるので、収益の安定にもつながっている。

一方で輸出には価格面以外の効果もあるようである。実際に輸出を手掛ける生産者の話によれば、「例えば米国から植物検疫の検査官が自分の梨農園に視察に来るとなれば、現場では雑草の手入れなどもより一層徹底してやろうということになる。現場にそうした緊張感が生まれることが、結果的に品質向上につながっている」とのことである。

(5) 輸出を継続できた要因

「鳥取二十世紀梨」の輸出はこの数年、より積極的な方向へと変わりつつある。それが可能なのも 1933 年の開始以来、途中、第 2 次世界大戦により中断を余儀なくされ、また急激な円高や豪雪等の自然災害に見舞われながらも、70 年以上にわたり輸出を継続してきた土台があるからである。「鳥取二十世紀梨」が長年海外で評価され輸出を継続できた要因として以下が挙げられる。

① 商品の独自性

第 1 に、他品種の梨には無い魅力があること。淡い緑色でジューシーな味わい、かつシャリシャリした歯ざわりは「鳥取二十世紀梨」に独特である。これは、1. (3) で述べたように、生産者、鳥取県、大学等が連携して黒斑病の克服や品種開発に取り組んできた結果である。また県下の選果、規格、販売窓口の統一などに早くから取り組んできており、現在は県内統一の等級（赤秀、青秀、優など）を設置することで、品質のばらつきを防いでいる。

② 保存技術の確立

第 2 に、保存技術を確立したこと。JA 全農とつとりは、梨の輸出拡大を図るため 1981 年と 1983 年に合計 1,200 トンの梨用貯蔵冷蔵庫を整備し、さらにその後、鳥取大学の支援を受けて鮮度保持包装技術を確立した。これらにより、長期間安定して梨を輸出できるようになった。

しかし従来 8 月から 9 月の収穫後に冷蔵庫で保存できるのは 12 月一杯くらいまでで、台湾で最も需要の大きい 1 月下旬から 2 月下旬頃の春節の時期まで保存することはできなかった。そこで JA 全農とつとりは、鳥取県で開発された、添加物を使わずに長期に鮮度を保つことができる氷温技術¹³を利用し、2003 年に台湾へ約 10 トンを試験輸出した。2004 年には国から 500 万円、県から 200 万円の助成を受け¹⁴鳥取市に 100 トンの氷温貯蔵庫を設置し、本格的に台湾へ春節向け輸出を行っている。

③ 産官学連携

第 3 に、産官学の連携である。黒斑病の克服に始まり、1956 年には鳥取県、鳥取大学、生産者らで構成する生産技術協議会が品種の整理を行い、二十世紀梨に注力することを決めた。また②で述べた貯蔵技術の確立は、JA 全農とつとりと鳥取大学の連携により実現し、さらに米国等の植物検疫に対しても同 JA と行政が一体となって対策にあたってきた。

3. 今後の課題

ここまで、「鳥取二十世紀梨」輸出の経緯や現状等について述べてきた。ここでは、今後「攻

¹³ 1970 年、鳥取県食品加工研究所の山根昭美博士が最初に発見。呼吸代謝が抑制されるため、老化の進行が遅くなり、細胞の活性が保たれる。生鮮物では冷蔵の場合より 3 倍から 5 倍の鮮度保持が可能。（社団法人氷温協会ホームページより）

¹⁴ 中国四国農政局「二十世紀梨の輸出再開に夢はずむ（鳥取・鳥取市）」2004 年 7 月

めの輸出」を拡大するための課題について整理、考察する。

輸出を主導する JA 全農とっとりとしては、収益性の高い台湾への高級品輸出を基盤としつつ、日常食向け中級品への展開を図り、将来的には中国市場等への進出を狙っている。

(1) 輸出のための計画的な開発と生産

鳥取県は、台湾向けに輸出可能な二十世紀梨の数量は 1,000 トン程度が限界ではないかとみている。その理由は、国内需要の低迷と生産者の高齢化により生産量全体が減少傾向にあること、需要に対し輸出数量が増えすぎると価格が下落してしまう恐れがあるからである。

また、生産は日本国内市場向けの主力商品である 2L や 3L サイズ (300~350g 程度) が中心であるが、4L や 5L サイズ (500g 程度) の大玉も一定割合生じる。その中から台湾向け輸出用が選別される。JA 全農とっとりによれば、そうした大玉が生じる割合は年間生産量全体の約 15%前後だが、気象条件等による変動も大きく、現状では台湾からの需要に全て応えられるだけの供給量は確保できていないとのことである。今後「攻めの輸出」を展開するためには、従来の「できた商品を可能な分量だけ輸出する」というプロダクトアウトから、「市場で求められている商品を必要な分量だけ生産し輸出する」というマーケットインの発想をさらに高め、計画的な開発と生産を行っていくことが必要ではないかと思われる。

(2) 中秋節に出荷可能な品種開発

台湾での需要のピークは中秋節であるが、現行品種では中秋節が 9 月初めに当たる年は出荷が間に合わない。そこで鳥取県園芸試験場等が中心となり、7 月から 8 月に収穫できる青梨の新系統を開発中である。

(3) 中国市場等への進出

中国へは 04 年から輸出がスタートし、JA 全農とっとりは 04 年 17 トン、05 年 6 トンを輸出した。これまで中国へは香港経由で輸出されていたが、直接輸出できるルートを開拓中である。既に天津港から陸揚げし、北京をはじめとする華北地方での販売を開始している¹⁵。ただし、同国市場における代金回収や荷扱い等の整備にはまだしばらく時間がかかりそうである。

(4) ブランド保護(偽ブランド対策)

2003 年、台湾で韓国産梨による産地偽装が発生した。韓国産「新高」の段ボール箱に偽って「鳥取梨」「JA 鳥取ひた」などの文字を記した販売事例が発見され、JA 全農とっとりは台湾側や日本の農水省に取締りの強化を要請するなど対策に追われた。今後も偽装対策を強化していく必要がある。

4. 他の主な梨輸出の取組み

政府が農産物の輸出倍増計画を掲げる中、「鳥取二十世紀梨」以外にも日本梨を台湾等へ売り込もうという動きが始まっている。主な取組み状況を整理すると、図表 14 のとおりである。共通していえるのはここ 1、2 年の間に急増していることと、台湾への輸出が圧倒的に多いことである。国内市場が低迷する中、県や市町村、ジェトロなどの支援を受けつつ、各産地の海外に販路を見出し始めている。これらの取組みが一過性のものに終わらず、事業として定着す

¹⁵ 「ニッポン発農産ブランド③ 鳥取のナシ、台湾で人気」2006 年 6 月 7 日付 日本経済新聞

るためには、収益性を上げることが必須である。今後の取組みが期待される。

一方、産地ごとに独自の工夫もなされている。例えばJA大分ひたは、NECやJA全農おおい、大分県産業科学技術センターと共同して大分県や日本園芸農業協同組合連合会の協力のもと、大分県特産の「日田梨」（品種は新高）を中国と台湾へ船舶で輸送する際に、センサ機能の付いたICタグ（荷札）を使う国内初の実証実験を2006年10月に開始した。箱の中に入れてられたICタグが輸送中の温度・湿度・衝撃値を記録し、到着後にそのデータを分析することで、最適な輸送条件を見つけ出す狙いである¹⁶。

図表 14:「鳥取二十世紀梨」以外の主な梨輸出の取組み状況

産地	輸出主体	品種	主な輸出先(数量トン)
大分	JA大分ひた	新高	台湾(06年10月時点127)
熊本	JAやつしろ	新高	台湾(04年3.8、05年60、06年75)
長野	JAみなみ信州	南水	香港(06年計画35)
		二十世紀	台湾(06年14)、香港(06年計画22.5)
鳥取	JA全農とっとり	愛宕	台湾(03年17.5、04年7.2、05年30.7)
新潟	JA全農にいがた	新高	台湾(06年計画18)
	JALしろね	新高	台湾・ロシア(06年計画 合計4.4)
佐賀	JA伊万里	新高	中国(06年4.5)、台湾(06年1.3)

【関連新聞記事、各県・JA ホームページより作成】

5. おわりに

JA全農とっとりでは、将来的に中国の富裕層を対象とした高級品の需要拡大を目指しているが、中国市場のどこにどれだけそうした富裕層がいるのかまだわからない部分も多く、さらに流通や知的財産保護といった制度面の課題も多い。従って、まずは確実に需要があり、販売ルートも既にある程度整っている台湾に集中し、韓国産や中国産との競争の中でさらに利益を上げられる仕組みを確立した後に、中国等の新規市場へ進出するのが現実的ではないかと筆者は考える。

また当然ながら、収益向上のため生産、流通、販売の各々で低コスト化は常なる課題である。とくに生産の低コスト化については、具体的なコストの数値目標と実行計画を掲げ、生産者自身がそれを納得したうえで自発的に取り組み、結果を検証できるようなマネジメントの実現が望まれる。さらに、現在は輸出の大部分がJA全農ととりの主導の下で行われているが、生産者自身が海外消費者の視点に立った商品作り等へ今後さらに積極的に取り組んでいくことを期待する。

最後に、ご多忙な中にもかかわらず取材に快く応じてくださった、JA全農とっとり園芸部長の横野栄樹氏、JA鳥取いなば河原町支店梨果実部長の安木均氏、鳥取県商工労働部兼農林水産部市場開拓課副主幹の鈴木仁氏（部署・役職はいずれも取材当時）に、この場を借りて改めて心から厚く御礼申し上げます。

以上

¹⁶ 「ナシ輸出にICタグ、NECなどが実証実験－温度変化など管理」2006年10月23日付 日経産業新聞7面

数値表

図表 10-2: 全国梨の国別輸出数量(トン)

	85年	89年	90年	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年	99年	00年	01年	02年	03年	04年	05年
台湾	0	49	15	0	0	0	21	16	0	400	332	400	385	498	556	725	1,072	908
香港	6,100	3,693	3,050	4,671	4,201	5,070	2,516	4,028	3,384	4,268	4,119	2,945	1,920	1,761	1,650	681	385	769
米国	1,864	2,448	1,205	1,050	935	696	404	397	354	307	484	533	415	377	367	403	371	368
中国	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	27
カナダ	1,667	691	321	342	261	142	44	70	111	89	0	66	0	0	0	0	28	28
オーストラリア	0	56	84	140	56	34	70	0	62	84	64	71	43	10	31	48	17	0
その他	4,520	2,247	1,800	1,960	1,449	1,323	832	1,354	986	953	408	171	432	215	60	29	53	37
合計	14,151	9,183	6,475	8,163	6,901	7,266	3,887	5,865	4,897	6,100	5,407	4,187	3,195	2,860	2,664	1,886	1,951	2,137

図表 11-2: 全国梨の国別輸出金額(百万円)

	85年	89年	90年	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年	99年	00年	01年	02年	03年	04年	05年
台湾	0	17	5	0	0	0	10	6	0	95	68	195	111	204	162	256	388	371
香港	1,485	857	859	1,499	1,344	1,241	791	1,169	1,113	1,463	1,563	1,035	507	404	454	212	125	266
米国	758	921	463	471	408	257	149	155	151	142	239	239	163	121	119	127	122	125
中国	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	10
カナダ	510	209	109	131	96	44	16	23	40	35	0	6	0	0	0	0	11	10
オーストラリア	0	23	40	65	24	11	24	0	26	35	26	28	17	3	10	18	7	0
その他	1,416	695	665	766	572	421	304	427	381	377	179	77	88	45	17	11	14	15
合計	4,169	2,723	2,143	2,931	2,444	1,974	1,294	1,779	1,711	2,149	2,076	1,580	885	777	762	624	681	796

図表 12-2: 「鳥取二十世紀梨」の出荷数量と輸出数量(鳥取県全体、トン)

	81年産	82年産	83年産	84年産	85年産	86年産	87年産	88年産	89年産	90年産	91年産	92年産
出荷数量	80,141	87,500	90,598	73,221	70,434	72,789	72,910	67,644	61,027	54,700	51,700	52,700
うち輸出数量	7,494	10,038	8,402	11,117	12,134	10,932	11,058	9,254	7,245	6,023	7,141	5,920
比率	9.4%	11.5%	9.3%	15.2%	17.2%	15.0%	15.2%	13.7%	11.9%	11.0%	13.8%	11.2%

	93年産	94年産	95年産	96年産	97年産	98年産	99年産	00年産	01年産	02年産	03年産	04年産
出荷数量	42,500	41,300	37,100	33,000	30,200	30,000	30,100	27,100	29,200	24,700	21,600	21,000
うち輸出数量	6,481	3,499	5,656	4,109	5,490	4,324	3,559	2,876	2,689	1,629	1,773	1,750
比率	15.2%	8.5%	15.2%	12.5%	18.2%	14.4%	11.8%	10.6%	9.2%	6.6%	8.2%	8.3%

図表 13-2: 「鳥取二十世紀梨」の国別輸出数量(JA 全農ととり取扱分、トン)

	87年産	88年産	89年産	90年産	91年産	92年産	93年産	94年産	95年産	96年産	97年産	98年産	99年産	00年産	01年産	02年産	03年産	04年産	05年産
台湾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	126	0	225	103	265	346	641	859	609
香港	2,849	3,067	2,444	1,983	2,263	1,804	2,558	1,189	2,513	1,454	2,439	1,761	1,131	1,250	1,110	887	418	229	213
米国	2,625	2,253	1,725	984	715	619	553	362	335	323	268	427	524	438	373	334	368	329	358
中国	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	6
カナダ	329	423	219	133	67	81	21	0	24	38	33	0	0	0	0	0	0	0	28
その他	2,487	1,841	1,123	1,059	1,203	876	751	406	929	501	704	227	185	326	87	59	48	17	1
合計	8,290	7,584	5,511	4,159	4,248	3,380	3,883	1,957	3,801	2,316	3,570	2,415	2,065	2,117	1,835	1,626	1,475	1,451	1,215

参考文献

- 折原司「輸出先進地に行く～日本の食材・産物を世界へ 二十世紀梨 JA 全農とっとり（鳥取県）」
『AFF（農林水産省広報誌）』2004年7月号
「果実輸出戦略検討委員会（第1回）議事録（2006年6月5日開催）」（財）中央果実生産出荷安定基金協会
金子弘道「鳥取20世紀梨のブランド化の戦略と課題」（「あぐりちゃれんじ 平成16年度報告書」（社）日本アグリビジネスセンター）
http://www.abc-japan.or.jp/supportnet/support/report/nougyouhoujin/16_2/index.html
- 喜多昌徳「農産物輸出におけるマーケティング上の課題」（『フレッシュフードシステム』2005年春号、第34巻2号、（社）流通システム研究センター）
- 鳥取県「二十世紀梨輸出年表」
鳥取県「二十世紀梨仕向別輸出数量の推移（JA全農とっとり扱い）」2005年2月
鈴木秀明「果実輸出の現状と今後の可能性」（『フレッシュフードシステム』2004年夏号、第33巻3号、（社）流通システム研究センター）
- JA全農とっとり『鳥取県におけるナシ輸出の取組について』（2004）
「全農 鳥取県本部 百年かけた技と味 二十世紀梨の輸出」（『フレッシュフードシステム』2004年夏号、第33巻3号、（社）流通システム研究センター）
「台湾における果樹産業事情」（『中央果実基金・海外果樹農業情報』No.75、（財）中央果実生産出荷安定基金協会、2003年8月 <http://www.net.inst.or.jp/~kajitsu/>
「鳥取県の地域政策事例」（『みずほ地域経済インサイト』みずほ総合研究所、2006年6月13日
中国四国農政局「二十世紀梨の輸出再開に夢はずむ（鳥取・鳥取市）」2004年7月
中国四国農政局「ととりの二十世紀なしを世界の二十世紀なしへ（鳥取・鳥取市）」2006年7月
永澤勝雄・松井弘之・土屋七郎 編修『果樹入門』実教出版、1999年
日本貿易振興機構（ジェトロ）「平成16年度農林水産物貿易円滑化推進事業 貿易情報海外調査報告書－台湾編－食品別輸入関連規則・流通事情」2005年3月
日本貿易振興機構（ジェトロ）「平成16年度農林水産物貿易円滑化推進事業 貿易情報海外調査報告書－香港編－食品別輸入関連規則・流通事情」2005年3月
農林水産省統計部『ポケット園芸統計－平成17年度版－』（財）農林統計協会、2006年3月
東野昭浩「台湾への果実輸出の現状」（『果実日本』第59巻第10号、日本園芸農業協同組合連合会、2004年）
丸山武「世界へ羽ばたく『二十世紀梨』（『研究ジャーナル』：特集 海を渡るブランド・ニッポン、Vol.29 No.1、（社）農林水産技術情報協会、2006年1月
村田謙司「『農林水産ニッポンブランド輸出促進都道府県協議会』の活動ならびに鳥取県の二十世紀梨輸出の取り組みについて」（『フレッシュフードシステム』2004年夏号、第33巻3号、（社）流通システム研究センター）
- 阮蔚「わが国の農産物輸出の動向と鳥取県のナシ輸出」（「中国・上海の市場と福島県食品の展望」第6章、日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所・福島県国際経済交流推進協議会、2005年3月）
阮蔚「日本の農林水産物輸出促進の動き－競争力強化をねらう「攻め」への方向転換－」（「農林金融」2005年6月号、農林中金総合研究所） <http://www.nochuri.co.jp/>
- 「ニッポン発農産ブランド③ 鳥取のナシ、台湾で人気」2006年6月7日付 日本経済新聞夕刊
「中央果実基金 輸出を販路に」2006年7月19日付 日本農業新聞3面
「梨『二十世紀』、高雄、台中で初販促 19日から、台北に加え」2006年9月6日付 日本農業新聞47面
「二十世紀梨の大玉、天候響きピンチ 品薄で予約を打ち切り 産地対応に追われ」2006年9月13日付 朝日新聞（鳥取県版）朝刊28面

「伊万里梨『新高』を中国と台湾に輸出します」2006年9月15日付 佐賀県記者発表資料
「吉野梨台湾へ／熊本・JA やつしろが出発式」2006年9月15日付 日本農業新聞 51面
「『新高』梨の台湾輸出量2倍に 選果徹底を要望／全農にいがたが検討会」2006年10月3日付 日本農業新聞 67面

JA みなみ信州「NEWS&TOPICS」2006年10月13日
「JA 大分ひた 台湾向け輸出も好調」2006年10月19日付 西日本新聞朝刊 25面
「ナシ輸出にICタグ、NECなどが実証実験－温度変化など管理」2006年10月23日付 日経産業新聞 7面
「梨『新高』の輸出本番 魅力ある手取り鍵」2006年10月24日付 日本農業新聞

JA 全農とっとりホームページ <http://www.jan-agri.com/index.html>

JA とうはくホームページ「二十世紀梨の紹介」 <http://www.jat.or.jp/netichiba/nasi/guide.html>

東郷ナシ選果場ホームページ <http://www.togo-kudamono.com/>

社団法人氷温協会ホームページ <http://www.hyo-on.or.jp/>

鳥取県ホームページ

「データで見る鳥取県」 <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=1819>

「2005年農林業センサス」

http://www.pref.tottori.jp/tokei1/toukei_sangyoukeizai/nouringvousensasu/2005_kakuhou/index.htm

「鳥取県農林水産業の概要（平成18年度）」 <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=3651>

「平成15年度 鳥取県県民経済計算」 <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=10314>

「二十世紀梨のあらまし」 <http://www.pref.tottori.jp/seisansinkou/kaju/top.htm>

財務省ホームページ「貿易統計」 <http://www.customs.go.jp/toukei/info/index.htm>

特許庁ホームページ「株式会社氷温研究所（鳥取県）」

http://www.jpo.go.jp/torikumi/chushou/pdf/bunkatu_jirei/tyuugoku_05.pdf

農林水産省ホームページ「統計」 <http://www.maff.go.jp/tokei.html>

「果樹生産出荷統計」

「青果物卸売市場調査の概要」

取材先

鳥取県商工労働部兼農林水産部市場開拓課副主幹 鈴木仁氏 2006年1月23日

JA 全農とっとり園芸部長 横野栄樹氏 2006年1月24日

JA 鳥取いなば河原町支店梨果実部長 安木均氏 同上

※部署・役職名はいずれも当時